

Kitakyushu City
Eco Tour Guide Book



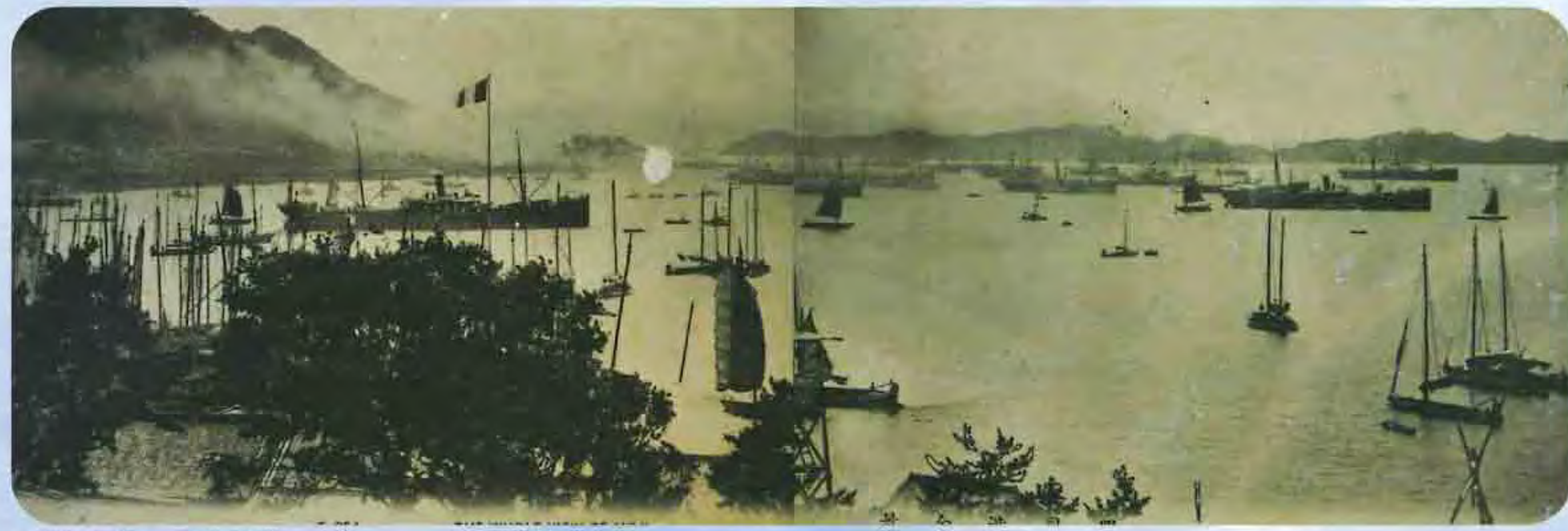
公害克服編 ～環境再生への道 そして世界の財産へ～

北九州市

エコツアー

ガイドブック

SDGs 未来都市 北九州市



明治末期の門司港
多くの外国船が行きかい、まちには中央資本の倉庫が建ち並んだ。



大正初期の商業都市・小倉
森鷗外の小説にも登場する常盤橋あたり。

この街は、
繁栄の歴史とともにあった。

九州と本州をむすぶ陸海交通の要衝として、古くから栄えた北九州地方。江戸時代、小倉は細川藩・小笠原藩の城下町として発展しました。明治・大正期には、門司が国際貿易港として栄華を誇り、若松・戸畑も国内有数の石炭積出港として活況を呈しました。鉄道や港湾が整備され、産業基盤を築いていた北九州に、最大の転機が訪れたのは明治34年（1901）。富国強兵政策により、八幡の地に官営製鐵所が誕生したのです。わが国の近代工業史の幕開けでした。製鐵所を中心に工業地帯が形成され、北九州はますます活気づきました。しかしいっぽうで、やがてこの街は、「公害」という大きな苦難と正面から向き合うことになるのです。

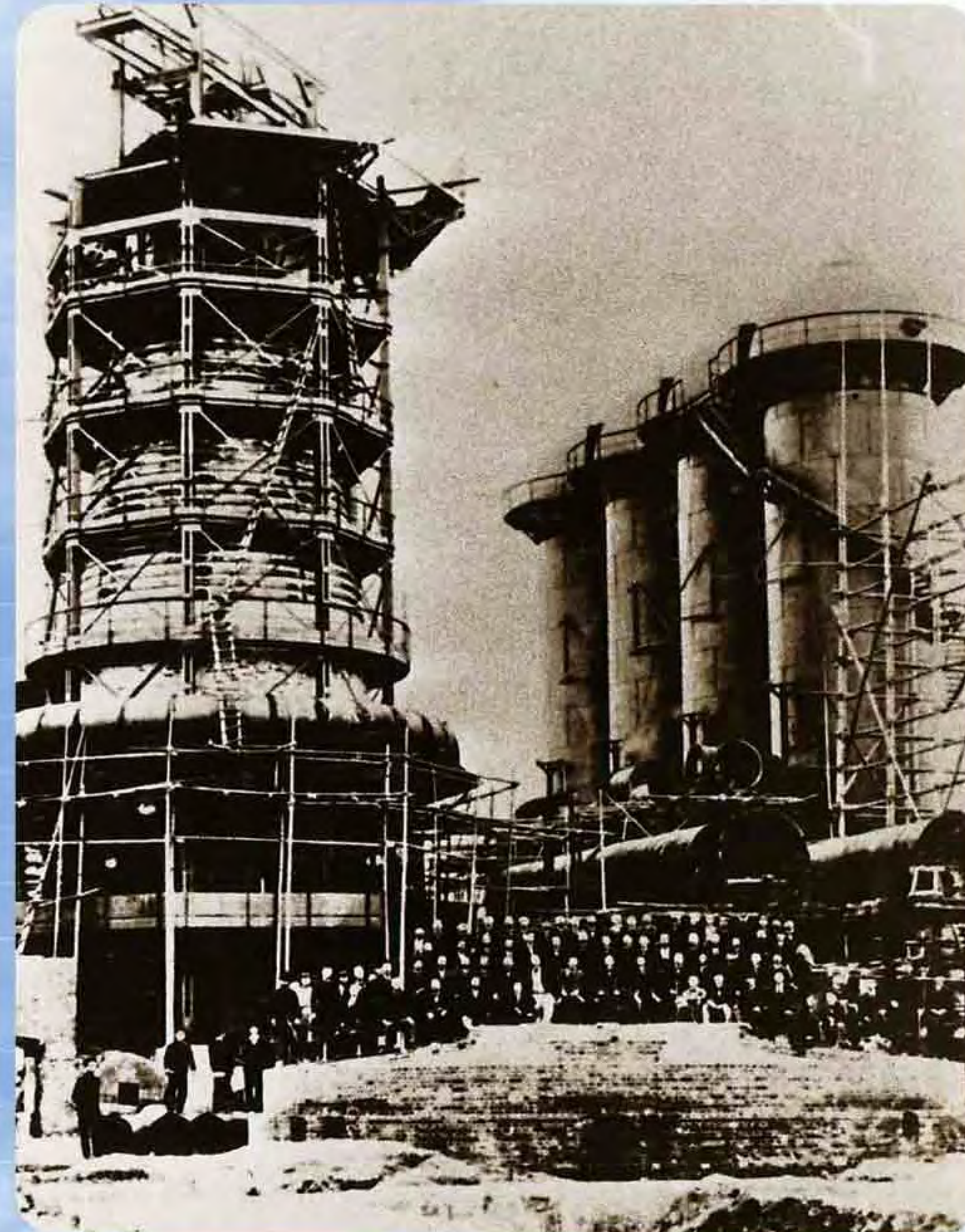
北九州市の、公害克服の奇跡のドラマと、「世界の環境首都」を目指すまでになったダイナミックな都市再生。そして、SDGsのトップランナーを目指し歩き出した北九州市の歩みをみなさんとともに旅してゆきたいと思っています。



大正14(1925)年
戸畑の渡船乗場。九州電気軌道の駅から乗り換える人でごった返した。



昭和30(1955)年頃
数千人の荷役・通称「ごんぞう」が若松の石炭景気を支えた。



明治33(1900)年
八幡製鐵所の建設中に来所した伊藤博文を囲んで記念写真。

のびゆく北九州が日本経済をけん引した

明治37(1904)年、日露戦争勃発。それとともに、鉄の需要が急増しました。そんな時代の流れの中、当時の北九州には迷いなく前進する力強いエネルギーが満ちあふれていました。

静かな漁村に、 日本最大の製鉄所がやってきた。

豊かな石炭産出量や、九州の交通の要衝という地の利を生かし、古くから栄えた北九州。明治34(1901)年には、明治政府の殖産興業(西洋諸国に対抗し、産業、資本主義育成により国家の近代化を推進した諸政策)のローガンの下、八幡の地に官営八幡製鉄所が誕生しました。ここから、わが国の近代工業史が始まります。



▲明治45(1912)年の八幡製鉄南門。建設費は日清戦争の賠償金だった。

風光明媚な海岸にも 巨大火力発電所が出現。

さらに昭和10(1935)年代、洞海湾口の海水浴場として親しまれていた中原海岸に、火力発電所が建設されます。これをきっかけに、一帯は工業地帯へと変ぼう。天に伸びる6本の煙突が街のランドマークとなりました。いっぽう、子どもたちが海で泳げなくなったため、地元の人々は戸畑市教育委員会に「市内の全小学校にプールを」とアピールしました。



▲昭和30(1955)年の九州電力中原発電所。昭和39(1964)年に解体されるまで、中原の六本煙突として親しまれた。



▲明治末期から大正初期の名護屋の浜(中原海岸あたり)。万葉に歌われた舞台。

万葉の歌
 霍公鳥 飛幡の浦に
 しく波のしばしば君を
 見むよしもかも
 ー詠み人知らずー
 一帯はかつてデートスポットにもなった美しい浜辺であった。

七色の煙とともに邁進する街

北九州の空を覆った色とりどりの煙。その独特の色合いは「七色の煙」と呼ばれ、栄華の象徴としてさまざまな歌に誇り高く刻まれたのです。

煙や轟音とともに、街は急成長した。

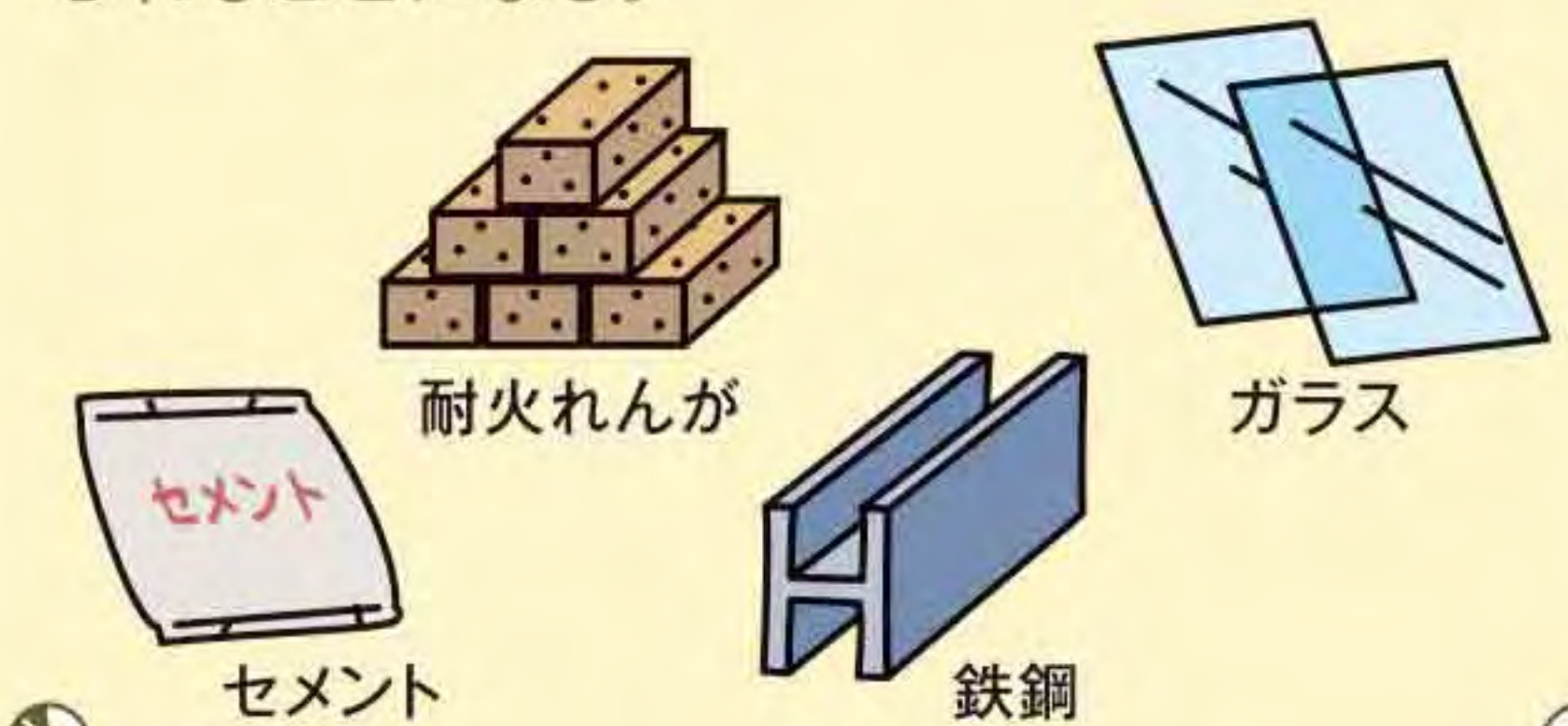
当時の北九州を象徴する「七色の煙」。酸化鉄が混じった赤い煙や、石炭の黒い煙などがもくもくと空を覆っていました。決して空気はきれいではなかったものの「工場の煙突から煙が出るのは当たり前のこと」と、市民はこれを受け入れていたのです。工業の発展により人々は働き口に恵まれ、街が活気にあふれていくことを実感していたからでしょう。



昭和37(1962)年の商店街。▶まちは連日、多くの人でにぎわっていた。

当時の主な工業製品

素材型産業に偏っていたため、後の石油ショック時には大打撃を受け、根本的な構造改革を迫られることになる。



時代の証言



故 寺坂カタエ
元中学校校長

八幡製鉄所の煙突の数が62本になったというので、小学校の学芸会は、近くの劇場を借りきって、長袖の袂に銀紙を煙突の数だけ貼りつけ、花道から舞台まで長い列で踊ったのが、私の小学校4年生のとき。公害、鉄冷えなど脳細胞の片隅にもなかった。



村田喜代子
作家

当時の八幡の街は、夜も昼も動いていた。私は今の東区の製鉄西門の近くで生まれ育ったが、深夜、眠っている枕元まで工場の遠い轟音が響き、ズシーンと家が揺れた。(略)寝る前に怖い本など読むと、そんな工場の騒音や震動にホッとして目をつむることができた。

「北九州思い出写真館(平成5年発行)より」

校歌・市歌は「七色の煙」賛歌だった

洞海湾の海ちかく
 生産誇る工場に
 のぼる煙のたくましさ
 あすの科学を育てゆく
 おおわれらの筒井小学校
 (筒井小学校校歌・阿南哲朗作詞)

焰炎々々 波濤を焦がし
 煙濛々々 天に漲る
 天下の壯観 我が製鉄所
 八幡 八幡 吾等の八幡市
 市の発展は 吾等の責務
 (八幡市歌・八波則吉作詞)



ほう がん

百万都市が包含した近代化の光と影

繁栄に活気づくまちと市民。高度成長を支える大都市としての誇りにあふれた時代でした。しかしその影で、工場群とともに暮らす人々は、想像を絶する苦勞を強いられました。

空から鳥が姿を消し、主婦はばいじんと闘った。

朝起きて、夫と子どもを送り出すと、主婦の忙しい一日が始まります。洗濯を繰り返す、家中をくまなく掃除しても干した洗濯物はすぐに汚れ、扇風機の羽には真っ黒いすすが溜まりました。さらに、子どもたちはぜんそくに悩まされ、医療費で家計はかさみました。朝からとめどなく降り注ぐ工場のばいじんと格闘が、彼女たちの日常となっていたのです。



▲昭和38(1963)年、世界にも例がない五市対等合併により九州初の百万都市へ。まちはお祭り騒ぎだった。

大腸菌さえすめない“死の海”洞海湾。

八幡製鐵所の創設以来、美しかった洞海湾周辺には工場群が林立し、そこから垂れ流される排水で、水質汚濁は国内最悪と言われるほどに深刻化しました。悪臭被害が著しく、住民は食物汚染への恐怖にもおびえなければなりません。



▲昭和30(1955)年頃。対岸は八幡製鐵所で、手前は硝子工場。この環境の中で、子どもたちは弁当をほお張っている。



▲洞海湾がもっとも汚れていたころの船のスクルー。短期間でここまで腐食した。

「死の海」新聞語録

- ・「魚の住めない洞海湾」
—総理府もびっくり—
酸素含有率ゼロ! もちろん魚は住めない。
(昭和42(1967)年3月8日 西日本新聞)
- ・「センをして全速」
漁民は響灘でとれた生きのいい魚の窒息死を防ぐため、洞海湾に近づくと生簀に木栓をして全速力で脱出。
(昭和42(1967)年6月30日 毎日新聞)

公害の被害を丸ごと受けた城山小学校の悲劇。

城山小学校は昭和31(1956)年、工業団地の完成にともない、その真ん中に開校しました。ばいじんにさらされた学校で、多くの児童がぜんそくや扁桃腺に苦しみました。学校は「公害に負けない教育」を目指して体育に力を注ぎ、体操・水泳・乾布摩擦などのほか、月に一度の山歩きや健康診断も実施。市は各教室に空気清浄機を設置し、プールにも浄化装置をつけるなど全面的に協力しましたが、厳しい環境に耐えかねて校区外に転出する生徒が後を絶ちませんでした。地域住民の希望で生まれた城山小学校は、こうして開校からわずか21年で閉校したのです。



▲当時の城山小学校。ばいじんが容赦なく教室を襲った。子ども、奥には煙突群が。チャンバラ遊びをする当時の様子。

「ともだち」

「きょうなら、ヨッチン。また、ともだちが一人へる。今まで、何人のともだちがかわっただろう。これからも、かわる人がいるだろう。この区いきが、工業区いきばかりに。そう思いながら、ともだちを見おくる。」

仲よく遊んだこと、けんかをしたことなどが、頭に浮かぶ。よその学校は、生徒がふえているだろう。よその学校がうらやましい。私も、ヨッチンといっしょにかわりたい。でも、私がかわつたら、また人数がへる。今でも少ないのに。私は、ぜったいかわるまい。そう決心した。

(昭和45年度 六年一組「文集」より)

エコボイス

公害のまち、そこにも
当たり前前の生活
人々の営みが
あった

城山小学校卒業生
井本雅枝氏
(旧姓古賀)

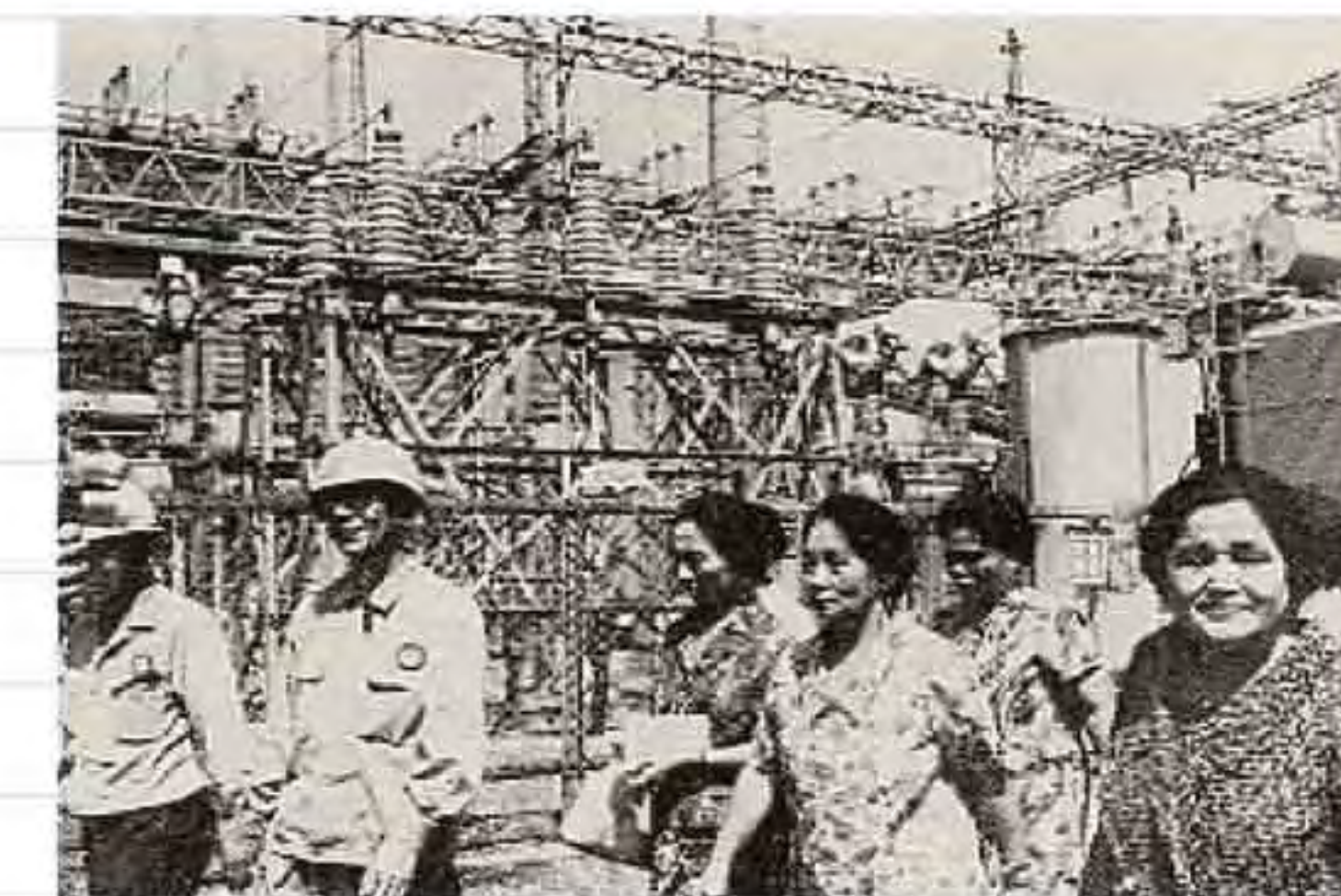


私は当時、城山小学校のすぐ近くに住んでいました。当時は、学校でも家でも、風が吹くとばいじんが舞い込んで、床はざらざら。真っ白な雑巾が、一回で真っ黒になっていました。お風呂に入る時には、母に、「鼻の中も洗いなさい」といつも言われていたのをよく覚えています。呼吸をする際、ばいじんを吸い込むので、鼻の中が真っ黒になるからです。学校には、手洗いうがいとは別に、目を洗う所もありました。公害の象徴のように語られる城山小学校ですが、当時を振り返ると、楽しかった記憶が蘇ります。公害に負けない体作りをするため、体育に力を入れており、水泳やポトボールの大会ではいい成績を収めたこともありました。林間学校もたくさんあり、小学生だったわたしは、「色々な所に行けて嬉しいな」と、無邪気に思っていたものです。これが、よその学校ではそんなに行つてないことを知った時はとても驚きましたよ。公害のまちと呼ばれる場所にも、当たり前前の生活、人々の日々の営みがあったのです。



子どもを守れ! 奔走するお母さんたち

公害による被害は生活を覆い、市民の健康をも侵し続けていきました。そんな中、「このままでは人間らしい暮らしができない」と、立ち上がった人々がいました。



▲工場を視察する婦人会のメンバー

家族を守る! ついにお母さんが立つ。

当時、戸畑の子どもたちが描く空の色は、黒や灰色でした。遠足で郊外に出ると「どうして空は青いの」と聞くほどに、発電所から出るばいじんで、昼も暗かったのです。子どもたちのぜんそく、掃除をしてもすぐに汚れる家…。そうした健康や生活面での問題から、最初に公害を強く認識するようになったのはお母さんたちでした。そしてついに、昭和25(1950)年、地元婦人会が立ち上がりました。メンバーには、発電所の幹部の妻も多かったといいます。家族を守りたい。その思いは、皆同じでした。

地道な手作り調査が公害克服の一步をしるす。

婦人会は、校区内の4か所にシーツやワイシャツを干し、いくら洗濯してもシミが残りきれいににならないこと、工場に近いほど汚染度が高いことなどを確認。これらの調査結果をもって、市議会に陳情しました。市議会は、この問題を早急に取り上げ、工場と協議を行い約1億円をかけて集じん機を設置することになりました。北九州における戦後最初の公害反対運動は、お母さんたちから始まり、その手法も、企業に直接抗議するのではなく、市議会を利用するという当時としては画期的なものだったのです。

「青空がほしい」社会を動かした切なる願い。

一地域の婦人会が取り組んできた公害問題も、昭和40(1965)年から、戸畑区に住む住民全体の問題として考えられるようになり、戸畑区婦人会協議会として活動するようになりました。協議会の中に13人から

なる、ばい煙問題専門委員会を設置。ばいじん量・亜硫酸ガス濃度や被害状況などについて、学識経験者の指導を受けながら、自主的に調査を行いました。そして、これらの調査結果をまとめた記録映画「青空がほしい」や公害展によって、公害の恐ろしさは全国に知られるようになりました。

コラム

Column

不朽のドキュメント「青空がほしい」



「青空がほしい」は、戸畑の婦人会が自主制作し、公害被害を訴えた約30分の8ミリ映画。公害展で放映されるや全国で大きな反響を呼び、公害反対運動の原動力になった。当時の主婦たちの熱意は現在の環境行政にも受け継がれている。



▲子どもたちの顔は、すぐにすすで真っ黒になった。



主婦たちの活動



洗濯物や菓子箱でのばいじん調査



行政への働きかけや市政懇談会



頻繁な集会・勉強会



映画「青空がほしい」の制作 etc

反響を呼ぶ公害展



訴えるすすけた布 鉄の腐食実験も展示

▲2年がかりで調べあげた公害実態調査結果を、腐食した鉄板や汚染された布、写真・ポスター・グラフ・図表などで紹介した。

(昭和41(1966)年10月22日 読売新聞)



決意を胸に、行政が走り出した

産学官民が一致協力して取り組んだ公害対策。民意を受け、行政は迅速に対応し、公害防止への動きはいっけに加速していきます。

努力のさなか 日本初のスモッグ警報発令!

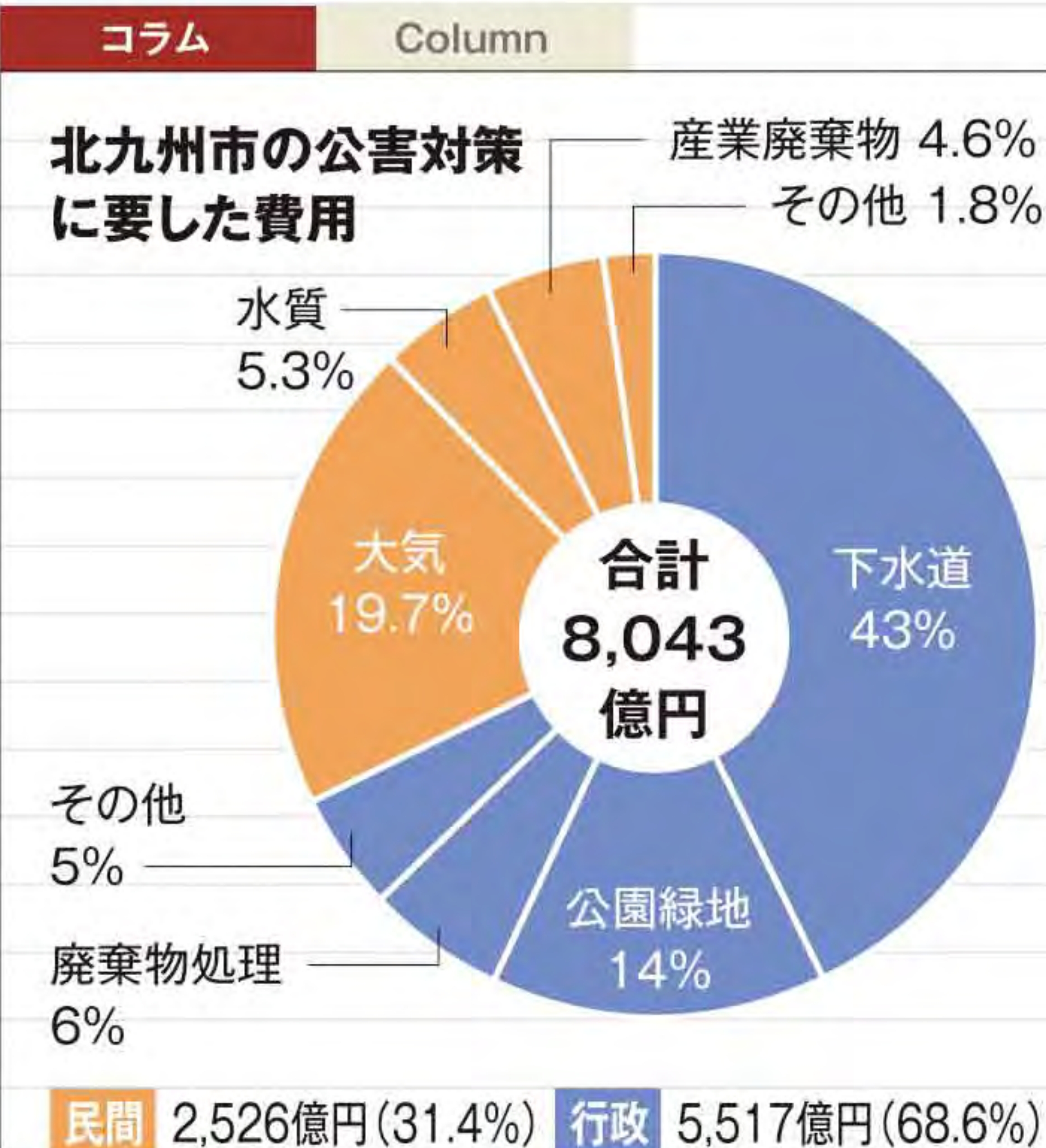
北九州市が発足した昭和38(1963)年、市はまず、専門家の協力を得て徹底した大気汚染・水質汚濁調査を開始し、工場公害診断や下水道整備にも着手しました。昭和39(1964)年に設置した「公害防止対策審議会」には婦人会の代表も参加。さまざまな施策が実をむすび始めた矢先の昭和44(1969)年、大気汚染防止法施行(昭和43(1968)年)後としては日本初のスモッグ警報が北九州市で発令され、市民を不安に陥れました。これを機に翌年には「北九州市公害防止条例」が施行され、大気・水質に関する規制は急速に強化されていきました。



▲この日は市長みずから紫川の掃除に参加。北九州市のシンボル河川も、当時はひどい水質汚濁に悩まされていた。(昭和43(1968)年5月31日 毎日新聞)

住民と企業、 歴史が培った対話の土壌。

当時の日本では、いわゆる四大公害事件など公害問題が多発し、被害者らが企業や国へ損害賠償を求める動きを見せていました。しかし北九州市では、市の仲介によって住民と企業の紛争が、すべて和解に至ったのです。明治時代から共存関係にあった住民と企業の間には、対立よりも対話の土壌がありました。また、和解の条件として「金銭」よりも「技術の向上による公害防止」が重視されました。公害対策のスムーズな進展にもつながった北九州市のこの手法は、全国的に高い評価を受けました。



誇りをかけ、公害防止に企業も動いた

市の公害防止協定制定に対し、企業はすみやかに調印。押し付けるのではなく、協力によって公害克服に至る「北九州方式」は、のちに世界が注目するところとなります。

協定順守に企業は真摯に取り組んだ。

公害防止協定の目的は、法律を補い、地域の実情に合った公害防止策を進めることにありました。大気・水質・騒音・悪臭・工場緑化などの項目について、市と企業は協定を締結。特に大気や水質については、法律より厳しい排出基準値を協定値として取り決めました。企業側は、この協定値の順守に努め、市はその監視を行いました。同協定が有効に機能した要因として、市の工業が、日本製鉄をはじめ日本を代表する大企業を中心としており、これら少数の大企業に対策を促すことで公害問題の大半を解決できたこと、また企業側も、社会的責任を意識して積極的に取り組んだことがあげられます。



▲市長と企業代表の協定調印風景。平成8年までに締結された協定は183件、誓約書の提出は883件にのぼる。

昭和47(1972)年には、硫黄酸化物に関する協定に47社54工場が一括調印。北九州市の公害対策史の象徴となった、全国初の大型締結でした。

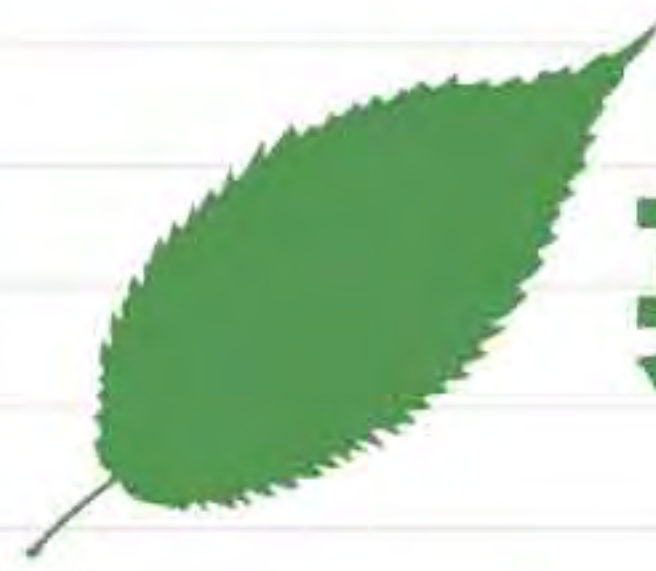
硫黄酸化物に関わる 公害防止協定書の主な内容

1. 硫黄酸化物に係る改善計画書に掲げた数値を達成すること。
2. 公害防止に関する技術を積極的に取り入れ、計画書の計画の改善を図ること。
3. 計画書内容の変更、計画外の施設を設置する場合、行政と協議し同意が必要であること。
4. 公害防止に関する行政指導、調査、資料提出要請等に積極的に協力すること。
5. 工場内への立ち入り、調査をさせること。

(昭和47(1972)年3月30日)

804,300,000,000円 ってナニ?

昭和47(1972)年から平成3(1991)年までの20年間に、市が公害対策に要した支出の総額です。このうち約7割を市が、3割を企業が負担しました。まちの繁栄と引きかえに失った環境を取り戻すために、莫大な費用と多くの時間が費やされました。



英知が結実した、奇跡の環境再生

大気汚染と水質汚濁。それは、北九州市の2大公害問題でした。しかし、人々は英知を結集し、澄んだ空と輝く海を取り戻したのです。世界が奇跡と呼んだ、環境再生の瞬間です。

苦難を超えて まぶしく見上げた青い空。

ばいじん、ばい煙、亜硫酸ガス、悪臭をまき散らした大気汚染は、子どもたちを巻き込んで、市民生活に深刻な被害を与えました。市は昭和45(1970)年に設置した「公害監視センター」から北九州市の空を24時間監視し、工場に向けて、大気汚染に関する細やかな情報と改善指示を送りました。また、企業も幾多の公害防止協定に努力で応え、燃料の転換や、省エネルギー化などによって厳しい排出規制を順守したのです。これら産学官民のたゆまぬ取り組みで市内の大気環境は急激に改善し、昭和53(1978)年には二酸化窒素の環境基準を達成。「七色の煙」はもはや過去のものとなりました。経済優先から環境優先へ、市民が求め続けた、あの青空がよみがえったのです。

「死の海」を蘇生させた 世界初の浚渫事業。

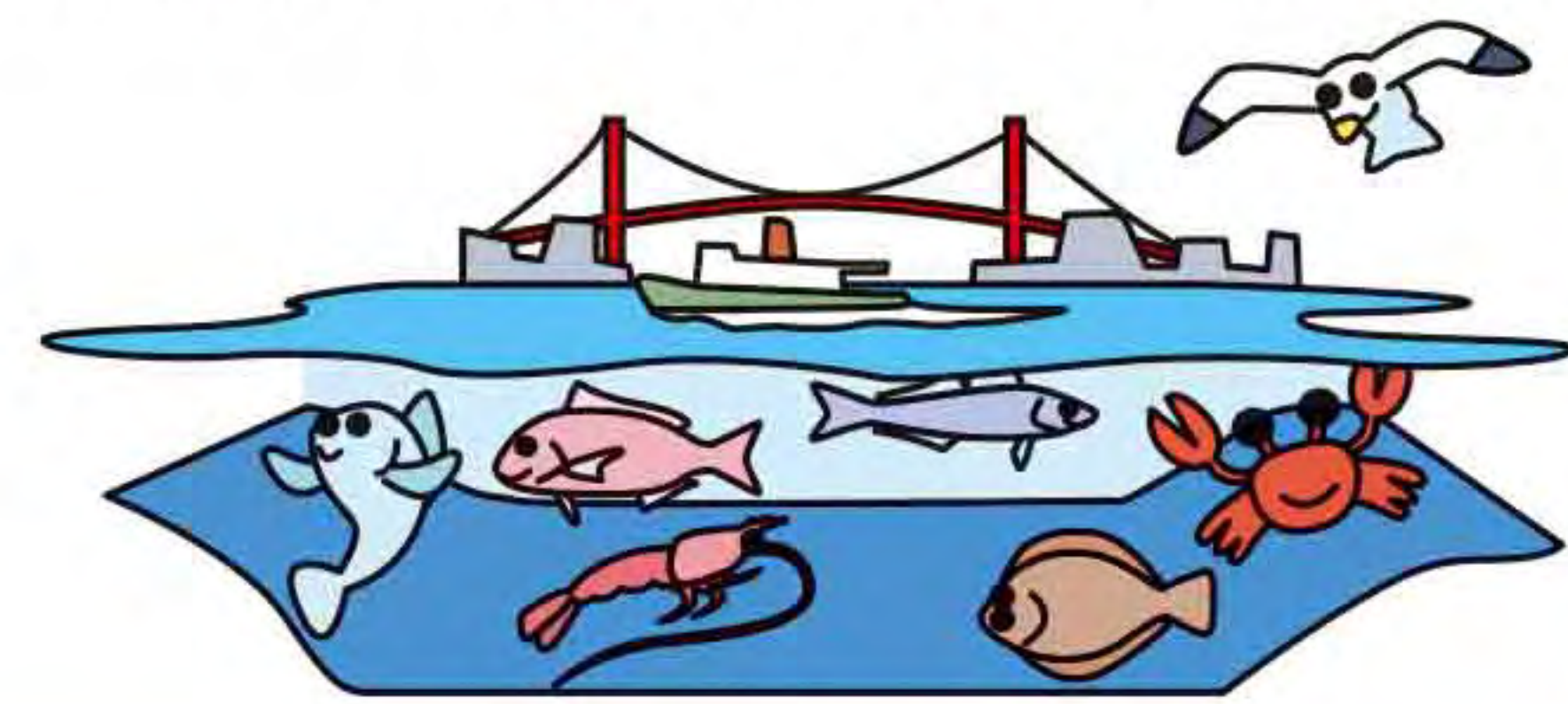
いっぽう、水質汚濁の象徴であった洞海湾(6ページ参照)でも、昭和49(1974)年、湾の底に溜まったヘドロを根こそぎすくい上げる浚渫工事がスタートしました。除去した35万m³ものヘドロは、完全密封した後、洞海湾の一部を切断して建設した処分地に埋めました。工事には巨費18億円と、約3年の歳月を要しましたが、その甲斐あって、早くも2年後の昭和51(1976)年にはすべての水質環境基準をクリアし、やがて湾に魚の姿が戻ったのです。世界初のアイデアを注ぎ込んだ難事業、そして不可能に思われた環境再生のドラマに、世界から惜しみない称賛が贈られました。今日、洞海湾は、湾口ではマダイ、湾奥ではシャコ、マハゼなど多くの魚介類が生息する生命の海へと鮮やかな変ぼうを遂げています。

時代の証言

じらい
爾来10年、今、若戸大橋の下にたたずみ、岸辺を洗う波に目を移すと、ゴミ一つ浮いていない水面にはサヨリが遊び、カモメが群れ飛ぶ海上には白い波を蹴って大小の船が行き交う。かつては「死の海」と呼ばれ、油で真黒に汚された海には近年たくさんの魚が甦りつつある。公害対策局は昨年環境展に洞海湾でとれた魚を展示した……クルマエビ、シャコ、カニ、スズキ、クロダイ、メジナ、ヒラメ、アイナメ、メバル、イシモチ等々……にみんなびっくり。行政、企業、市民が一体となった成

果はかくも素晴らしい。自然の回復力も偉大という外はない。「これが洞海湾ですか!!」先日訪れた環境庁のお役人は卒直な驚きを見せてこう叫んだそうである。

【公害行政の歩み】北九州市公害対策局(昭和56(1981)年発行より)



1960年代



▲煙に覆われた空。多くの人がぜんそくに苦しんだ。



▲大腸菌もすめない死の海 洞海湾。



▲紫川沿いに密集する違法建築。汚水は川へ流された。

現在



▲澄み渡った青空。



▲よみがえった洞海湾。100種類以上の魚介類が生息。



▲親水空間が整備され、街のシンボルとなった紫川。

エコ・ボイス

eco voice

公害克服の 技術で 環境と経済の 両立を実現

環境ミュージアム館長
中蘭 哲 氏



戸畑婦人会の方たちが作った8ミリ映画「青空がほしい」。これを契機に、市民・企業・行政が一体となった公害克服への歩みが始まりました。公害防止で、最も苦労したのは企業でした。生産設備よりも巨大な排ガス・排水処理施設が必要となり、建設費も運転経費も巨大な額になりました。しかも、利益とは直接結びつきません。しかし、この時、企業では技術革新が起きました。生産設備そのものを、公害発生の少ない施設に改善するという革新的な発想でした。エネルギーを例にとると、生産設備を省エネルギー型に改善することにより、使用するエネルギーを減らせるだけでなく、排出ガス量も減るので、処理設備は小型化できます。環境を改善しながら、生産コストと処理コストを引き下げることができるようになりました。同じ考え方は、水の使用や、原料の使用、副産物の再利用などにも、取り入れられました。こうして環境と経済の両立が可能になったのです。企業の技術革新は、環境産業振興の契機となりました。市民、行政の経験と共に、国際協力に活かされ、いまでは地球環境問題の解決に貢献しています。

新生・北九州市、その先の使命へ

急速に環境再生を果たした北九州市に、国内はもとより世界の人々の注目が集まりました。次々と栄えある賞を受賞。以後、そのノウハウは国際環境シーンをリードしていくのです。

灰色の街から、星空輝く緑の街へ。

市の熱意ある取り組みと、それによって得られた目覚ましい変化は、国や他の自治体にも驚きと感動を与えました。昭和 57(1982)年には「緑の都市賞・内閣総理大臣賞」を受賞。昭和 60(1985)年の経済協力開発機構

(OECD)の環境白書は、その見ちがえるほどの変ぼうを「Gray city to green city (灰色の街から緑の街へ)」と紹介しました。さらに昭和 62(1987)年、環境庁のコンテストで大気環境が良好な「星空の街」に選定されるなど、新生・北九州市は年々クローズアップされていきました。



▲「新日本三大夜景」の一つにも選ばれた血倉山山頂からの眺望。

世界の栄光 「グローバル500」を受賞。

栄誉ある称賛は世界からも届きました。公害克服の経験を生かした北九州市の環境国際協力の取り組みに対し、平成 2(1990)年には国連環境計画(UNEP)から「グローバル 500」を受賞し、2年後の環境と開発のための国連会議(地球サミット)では「国連地方自治体表彰」を日本で唯一受賞しました。ともに、日本の自治体として初めての快挙でした。官民一体となった北九州市の活動が世界の舞台上で高い評価を受けたのです。



▲「国連地方自治体表彰」受賞風景。



▲「グローバル500」受賞風景。

北九州市がリードする環境国際協力

世界には、かつての北九州市をはじめとした日本の工業都市のように、公害問題で苦しんでいる国がたくさんあります。そのような国に今、北九州市の環境技術が求められています。

経験に培われた環境技術で国際協力。 広がるKITAの活動。

市がこれまでに培った技術や経験を発展途上国に移転することを目的に、地元経済団体が中心となって、昭和 55(1980)年に設立されたのが KITA((公財)北九州国際技術協力協会)です。開発途上国の「持続可能な発展」を目指した「人づくり」に向け、環境や工業分野での研修員の受け入れや専門家派遣などを行っています。本市で先端技術を身につけた発展途上国の人々は、それぞれの国で環境改善に大きく貢献しています。

アジアで生かされる北九州市の経験。

環境の悪化が進むアジア地域を支援しようと、環境保全や廃棄物管理、エコタウン事業などの経験を生かして環境国際協力を行っています。中国・フィリピン・タイ・インドネシアなどで、現地の市民と一緒に大気汚染や廃棄物減量化などの協力プロジェクトに取り組んでいます。こうした成功事例は、他都市と広く共有していくため、アジアの都市ネットワークを通じて情報発信しています。

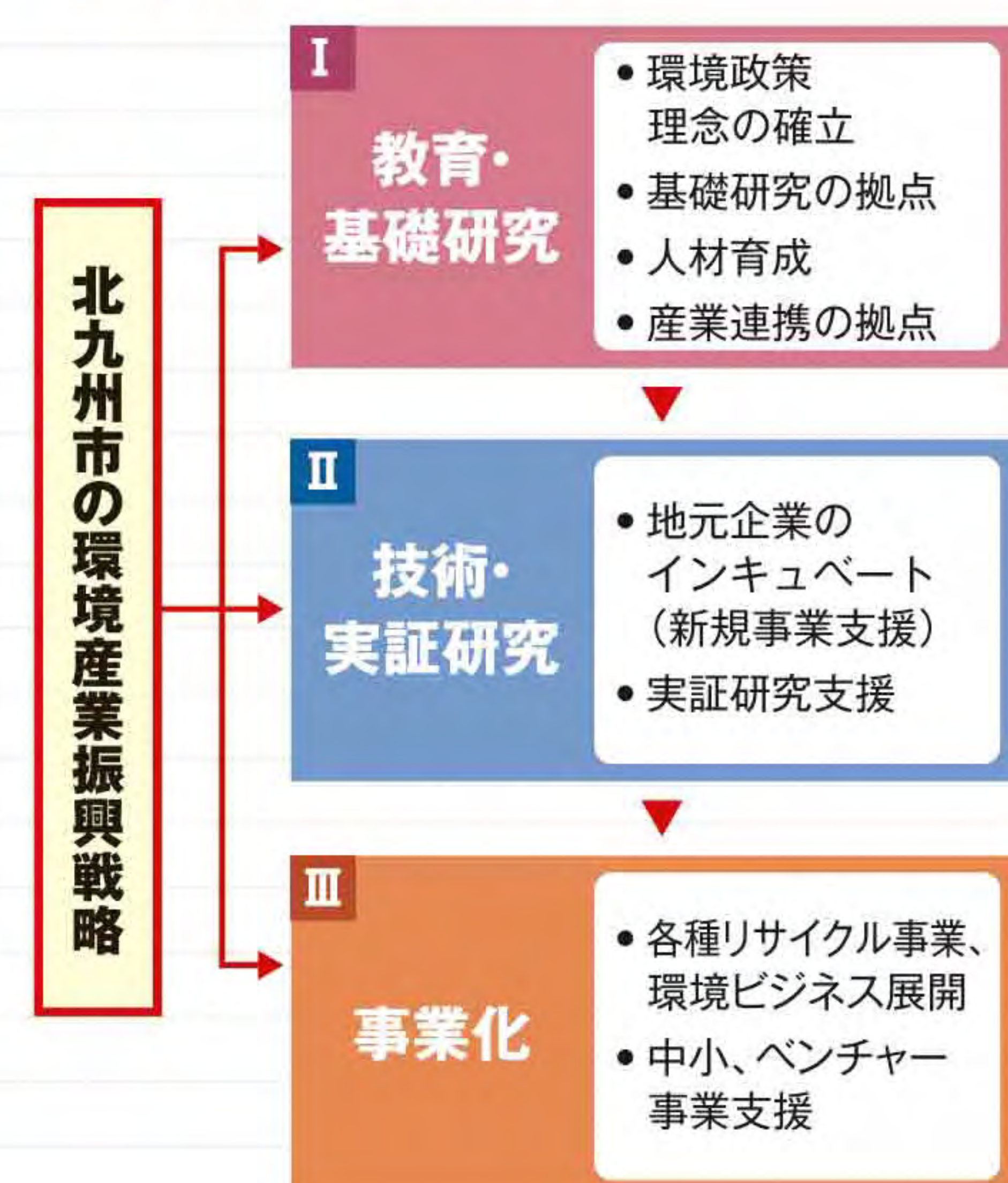
コラム Column

「資源循環型社会」を目指して 北九州エコタウン事業

環境保全と産業振興施策を統合し、環境分野の「教育・基礎研究」「技術・実証研究」「事業化」を総合的に展開しているのが北九州エコタウン事業です。あらゆる廃棄物を資源として活用し、可能な限り廃棄物をゼロに近づける“ゼロ・エミッション”を推進。世界的に注目され、KITAの研修員の実践的学習の舞台ともなっています。



●北九州方式3点セット





アジアの環境人材育成拠点を目標として

北九州市は、産学官民が連携し、研修員受け入れや専門家派遣、調査など、幅広い活動を行っています。人材育成を通じて、市の経験と技術が世界で花開こうとしています。

世界に広がる北九州の環境技術。《研修員受入・専門家派遣実績》

ヨーロッパ地域
受入:405人
派遣:3人

**中近東・
アフリカ地域**
受入:1,953人
派遣:26人

アジア地域
受入:5,035人
派遣:169人

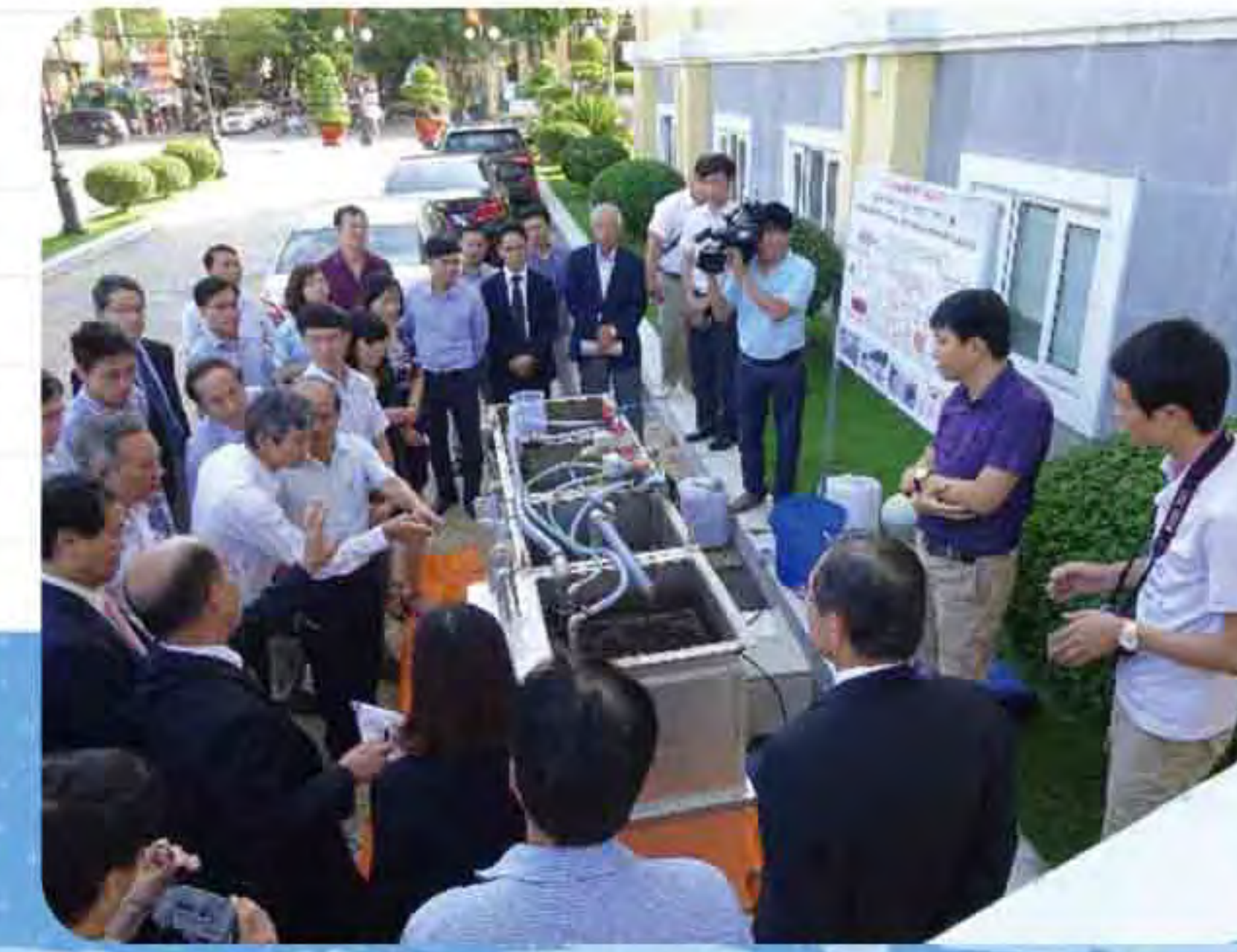
オセアニア地域
受入:178人

中南米地域
受入:1,849人
派遣:13人



▲世界各国の研修員がKITAでさまざまな技術を学んでいる。

受入:165カ国・9,420人
(1980年度～2018年度までの総数)
派遣:25カ国・211人
(1986年度～2018年度までの総数)



▲「ベトナム国ハイフォン市」での市場からの排水の浄化処理テスト



▲専門家派遣によるコンポスト技術の普及。(インドネシア・スラバヤ)

😊 帰国研修員の活躍 😊

- チュニジア** (国家衛生公社勤務)
工場排水取締り責任者として、研修で作成したアクションプランを活用し、汚染水処理対策に取り組んでいます。
- カザフスタン** (自動車工場勤務)
省エネ推進活動に着手し、前年度よりも電気代の削減(10%)、熱エネルギー使用量の削減(7.7%)、下水排出量の削減(22%)、という大きな成果を得ました。
- ペルー** (自治体職員)
国内で初めてとなる地域レベルでの環境管理と廃棄物処理の取組として、学校での環境教育と有機肥料(コンポスト)の生産を開始しました。

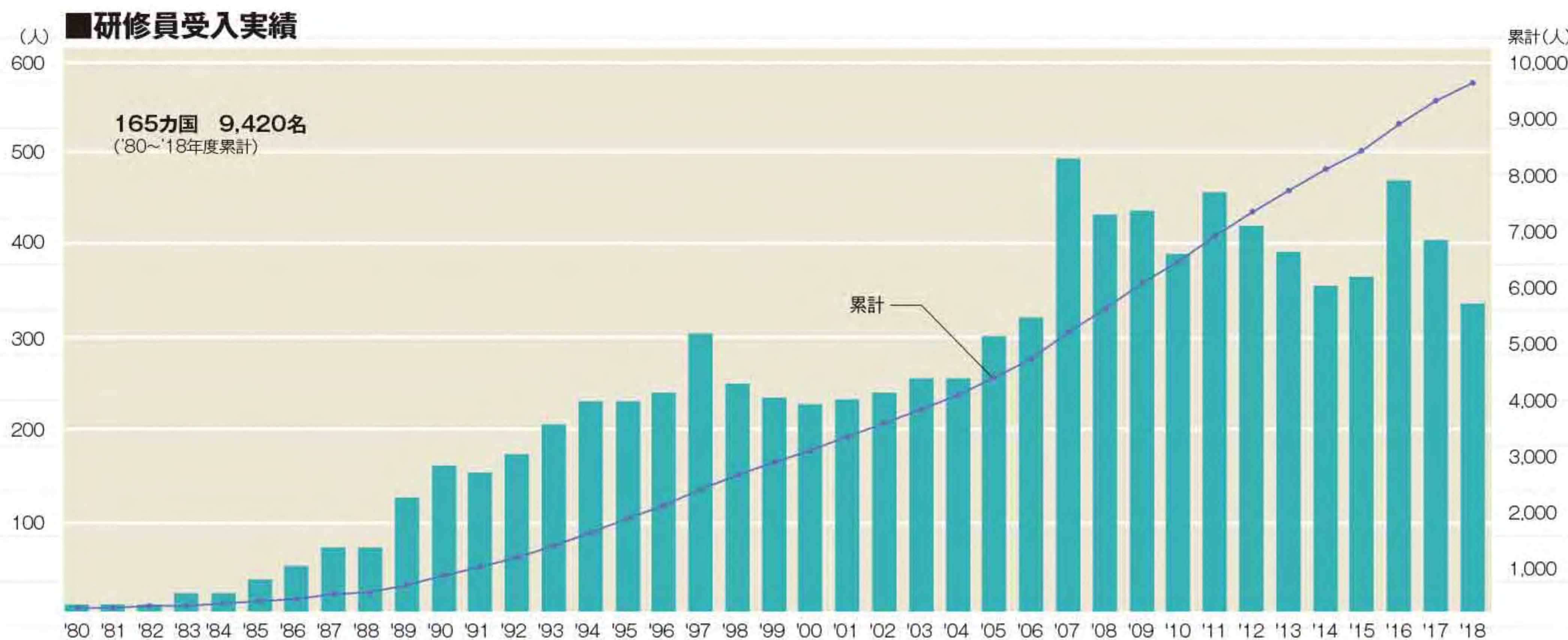
友好都市・大連市への協力



水道の分野でも、国際協力に大きく貢献

北九州市上下水道局では、1990年から25年以上にわたり、継続的に上下水道分野の国際技術協力に取り組んできました。これまで、13カ国に約200名の職員を派遣し、156の国や地域から6,000名以上の研修生を受け入れ、途上国での水環境改善に貢献しています。

特にカンボジアでは、内戦終結直後の1993年に70%程度であった無収水率を、2006年には北九州市並みの8パーセントに低減させ、飲料可能な水道水を実現させました。このことは、「プノンペンの奇跡」と言われる程、大きな成果となりました。





そして「世界の環境首都」へ

子どもたちに未来へのバトンを渡すため、産学官民が思いを一つにして活動し、情報を発信しています。北九州市は世界の環境首都を目指し、前進し続けています。

世界の環境首都 ランドデザイン策定へ。

「環境首都」とは、市民が真の豊かさを実感し、「ずっとここで暮らしたい」と心から思えるまちのことです。北九州市は平成16(2004)年度、「世界の環境首都」の基本理念を示すランドデザインを策定しました。現在、市民・NPO・企業・行政等が協働で、さまざまな取り組みを進めています。そのシンボル事業であり、環境に配慮したまちづくりを提案するイベント「エコライフステージ」が年1回開催されています。



▲日ごろの環境活動を発表するエコライフステージ。2日間で15万人が来場。

高まる市民意識。 北九州市の挑戦は続く。

ごみ減量化、教育現場での実践的取り組み、モラル・マナーアップの向上といった面で明確な成果があがるなど、市民レベルでの環境首都への意識は定着しつつあります。一方、環境国際協力やエコタウン事業への取り組みによって、環境首都としての北九州市の評価も、世界的に高まっています。婦人団体の声から始まった公害克服と環境再生の物語は、世界へ受け継がれようとしています。美しい地球を未来へ。北九州市の挑戦は続きます。



▲曾根干潟を守るための清掃活動。実践活動は教育現場でも盛ん。

北九州市は世界の都市
にとってのモデルです。



元国連「環境と開発に関する世界委員会」委員長
グロ・ハルテム・ブルントラント氏

(読売新聞社提供)

環境のことは北九州市
に聞きなさい!



ノーベル平和賞受賞者
ワンガリ・マータイ氏

an environmental role model



▲世界的米国誌「TIME」が北九州市を「環境モデル」と紹介。

「環境モデル都市」に認定 ～低炭素社会の実現に向けて～

北九州市は平成20(2008)年7月22日、国から「環境モデル都市」に認定されました。これまでの環境への取り組みや低炭素社会づくりに向けた提案内容が評価されたものです。

市域の二酸化炭素の排出量を2050年までに、2005年度比で50%削減。また、アジア各都市とのネットワークを生かし、海外での削減(本市排出量の150%)を含めて、合計で200%相当の削減を目指します。



環境未来都市に選定

「環境未来都市」とは、国が特定の地域を選定して、そこで「環境」や「超高齢化」などの課題を解決するために様々な取り組みを推進し、優れた成功事例を創出しようとするものです。平成23(2011)年に、北九州市を含む11地域が選定されました。

北九州市は、超高齢化・少子化・人口減少が進むなか、これまでの取り組みを一層進化・加速させ、「地域や都市(まち)の中で人が輝く、賑わい・安らぎ・活力のあるまち～公害を乗り越えた経験と持続的に創造するイノベーションを活かして～」をコンセプトに、市民が中心の「誰もが暮らしたいまち」「誰もが活力あるまち」の実現を目指します。





誰一人取り残さない — No one will be left behind —

SDGs未来都市 ～北九州市の新たな挑戦～

北九州市は、公害克服で培ってきた市民力、ものづくりの技術を活かし、「環境モデル都市」「環境未来都市」をはじめ、様々な取り組みを行ってきました。これまでの北九州市の経験を活かし、「SDGsのトップランナー」を目指し、新たな取り組みが進められています。

SDGs(持続可能な開発目標)とは

SDGs(持続可能な開発目標)とは、2015年9月の国連サミットで全会一致(193カ国)で採択された、2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない(No one will be left behind)ことを誓っています。SDGsは、開発途上国のみならず、先進国自身も取り組むユニバーサル(普遍的)なものであるとされています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



第1回「ジャパンSDGsアワード」特別賞を受賞

2017年12月、北九州市を含め、12団体が第1回「ジャパンSDGsアワード」を受賞し、首相官邸で表彰を受けました。(自治体では北海道下川町と本市のみ)

事務局である外務省より、本市の「環境・国際貢献をはじめとする取り組みはトップレベルの功績であり、他の自治体の手本になる」という講評をいただいています。



「SDGs推進に向けた世界のモデル都市」に選定

2011年に、OECDより「グリーン成長都市」に選定された北九州市は、2018年4月、SDGsの分野においても「SDGs推進に向けた世界のモデル都市」に選定されました。

これは、アジア地域では初めての選定でした。



「SDGs未来都市」及び「自治体SDGsモデル事業」に選定

2018年6月に、国より「SDGs未来都市」(全国29自治体)に選定されました。更に、国が費用の一部を補助する「自治体SDGsモデル事業(全国10事業)」にも本市の提案事業が選定されました。



SDGs達成に向けた本市の3側面での取り組み



「真の豊かさ」にあふれ、世界に貢献し、信頼される「グリーン成長モデル都市」の実現



北九州市の環境再生とSDGs未来都市への道のり

年号	北九州市の動き	社会の動き
1901 (明治34年)	・官営八幡製鐵所操業。「鉄のまち」として発展	・20世紀開幕、福沢諭吉没
1960年代 (昭和35年～)	・重化学工業の発展とともに公害問題深刻化(ばい煙・廃水による汚染)	・安保闘争、三井三池争議
1963 (昭和38年)	・5市合併により北九州市誕生 ・衛生局公衆衛生課に公害係設置(4名)	・初国産アニメ「鉄腕アトム」
1964 (昭和39年)	・大気汚染自動測定機設置(硫黄酸化物・浮遊粉じん)	・東京オリンピック開催
1965 (昭和40年)	・洞海湾周辺地域で年平均80t/km ² /月(最大108t)の降下ばいじん量を記録 ・戸畑婦人協議会が記録映画「青空がほしい」を制作	・夢の島、モンキーダンス
1969 (昭和44年)	・北九州市で日本最初のスモッグ警報発令 ・洞海湾水質調査で溶存酸素量0.6mg/l、COD48.4mg/l、シアン、ヒ素などの有害物質が高濃度に含まれると判明。以後「死の海」と呼ばれる ・北九州市大気汚染防止連絡協議会設立	・アポロ11号月面着陸
1970 (昭和45年)	・スモッグ警報発令権限を北九州市長へ委譲 ・本庁舎内に公害監視センターが完成 ・北九州市公害防止条例公布	・日本万国博覧会開催、三島事件
1971 (昭和46年)	・特殊気象情報通報制度を確立 ・本格的な廃棄物焼却工場完成	・ドル・ショック、アンノン族
1972 (昭和47年)	・市内54事業所と公害防止協定締結	・日中国交回復、パンダブーム
1974 (昭和49年)	・洞海湾浚渫工事開始(～1975年7月)	・田中首相、金脈問題で退陣
1979 (昭和54年)	・緩衝緑地事業が始まる(～1983年度)	・省エネルギー、地方の時代
1980 (昭和55年)	・臨海部に大規模な廃棄物処分場開設 ・紫川堆積汚泥浚渫工事完了(1969年開始) ・財団法人北九州国際技術協力協会(KITA)設立	・学園ドラマ人気、竹の子族
1985 (昭和60年)	・経済協力開発機構(OECD)の環境白書で「灰色の街」から「緑の街」へ変ぼうを遂げた都市として紹介	・日本人宇宙飛行士誕生
1987 (昭和62年)	・「星空の街コンテスト」(環境庁)で大気環境が良好な都市として「星空の街」に選定	・国鉄民営化、サラダ記念日
1990 (平成2年)	・国連環境計画(UNEP)から日本の自治体として「グローバル500」初受賞	・バブル経済、成田離婚
1992 (平成4年)	・リオで開催された地球サミットで世界11都市とともに「国連地方自治体表彰」を受賞	・地球サミット、低公害車
1997 (平成9年)	・エコタウン事業地域承認	・たまごっち
2000 (平成12年)	・国連ESCAP主催の環境大臣会議が本市で開催され、「クリーンな環境のための北九州イニシアティブ」が採択	・2000年問題、IT革命

年号	北九州市の動き	社会の動き
2001 (平成13年)	・大連市との国際環境協力が認められて、「中国、国家友誼賞」受賞	・米国同時多発テロ、愛子様誕生
2002 (平成14年)	・ヨハネスブルグで開催された地球サミットで「地球サミット2002持続可能な開発賞」を受賞(世界で2件) ・地球サミット実施計画に「クリーンな環境のための北九州イニシアティブ」が明記 ・「環境ミュージアム」開設	・日韓共催サッカーWカップ
2004 (平成16年)	・人と地球と未来の世代への北九州市民の約束として「ランドデザイン」を策定	・新潟県中越沖地震
2006 (平成18年)	・国連大学の「持続可能な開発のための教育」(ESD)の地域拠点(RCE)に認定	・ライブドア事件、ハンカチ王子
2007 (平成19年)	・北九州市プラスチック資源化センター稼働開始 ・中国・青島市と日中循環型都市協力事業開始	・郵政民営化
2008 (平成20年)	・第7回日本の環境首都コンテストで、総合第1位(2年連続) ・「環境モデル都市」に選定 ・中国・天津市と日中循環型都市協力事業開始	・毒入りギョーザ ・サブプライム問題
2009 (平成21年)	・「北九州市環境モデル都市行動計画(北九州グリーンフロンティアプラン)」策定 ・環境省が電気自動車等にかかる実証実験を北九州市で開始 ・「北九州次世代エネルギーパーク」開設 ・「北九州水素ステーション」オープン	・草食系男子 ・新型インフルエンザ
2010 (平成22年)	・北九州市スマートコミュニティ創造事業が国の次世代エネルギー・社会システム実証地域に選定 ・「アジア低炭素化センター」設立	・スマートシティ ・AKB48
2011 (平成23年)	・経済協力開発機構(OECD)の「グリーンシティプログラムにおけるグリーン成長都市」に選定 ・「北九州市循環型社会形成推進基本計画」策定 ・「国際総合戦略特区」選定 ・「環境未来都市」選定	・東日本大震災 ・なでしこジャパン
2012 (平成24年)	・「北九州市響灘ビオトープ」オープン	・東京スカイツリー
2013 (平成25年)	・「OECDグリーンシティ・プログラム北九州レポート発表会議」の開催	・富士山世界文化遺産登録
2016 (平成28年)	・G7北九州エネルギー大臣会合(EMM)の開催	・熊本地震
2017 (平成29年)	・フィリピン・ダバオ市との「環境姉妹都市提携に関する覚書」の締結	・インスタ映え ・付度
2018 (平成30年)	・OECDの「SDGs推進に向けた世界のモデル都市」に選定 ・SDGs未来都市に選定	・そだねー

歴史をつなぎ、人をつなぎ、 未来へつなぐミュージアム。

北九州市環境ミュージアム

北九州市 環境ミュージアム



第3ゾーン

各ゾーンがストーリーでつながっていく展示施設

ミュージアムの館内に入ると、北九州市の風景の大パノラマが広がる「プロローグ」から始まり、「1北九州市の変遷」「2公害克服の歴史」「3地球環境とわたしたち」、「4環境技術とエコライフ」「5SDGs未来都市北九州市」の5つのゾーンへと進んでいきます。特に第3ゾーンでは、地球問題等に、実際に触れ、楽しみながら学ぶゲームなどのしかけも充実。

見るもの、触れるもの、すべてに驚きと気づきをもたらすミュージアムです。



プロローグ



第1ゾーン



第2ゾーン



第4ゾーン



第5ゾーン

環境をナビゲートする、環境をコーディネートする 環境学習コンシェルジュ



環境学習コンシェルジュは、学びたいテーマ、目的、ニーズに合わせて北九州市で出来ることを皆様と一緒に考えナビゲートする、環境学習のコーディネーターです。市内の環境学習施設や学習プログラムなどの紹介、エコツアーの企画立案、研修やセミナーのご相談など、様々な環境学習のお手伝いをいたします。

【基本情報】

北九州市八幡東区東田2-2-6

TEL.093-663-6751

開館時間 展示部分/ 9:00~17:00(入館は16:30まで)
情報ライブラリー・リユースコーナー/ 9:00~19:00
(土・日曜日と祝・休日は~17:00)

休館日 月曜日(祝・休日の場合は翌日)と年末年始

入館料 無料 ※地球の道は次頁プログラム参照

<https://www.eco-museum.com/>



ぼくらの名前は3Rの
“未来ホタル”です



リデュースの
デューくん リサイクルの
サイくん リユースの
ユーちゃん

平成13(2001)年に開催された北九州博覧祭のパビリオンとして誕生以来、環境学習の場、環境活動の拠点として市内外から多くの方が訪れている「環境ミュージアム」。

この本で紹介した公害克服の歴史や世界の環境問題、身の回りのエコ活動や市民・企業の環境への取り組みなどについて、多角的に展示しています。

「SDGs未来都市」である北九州市のこれまでの歴史を学び、これからの一人一人の在り方を、「見て・触れて・楽しみながら」、いっしょに考えましょう。



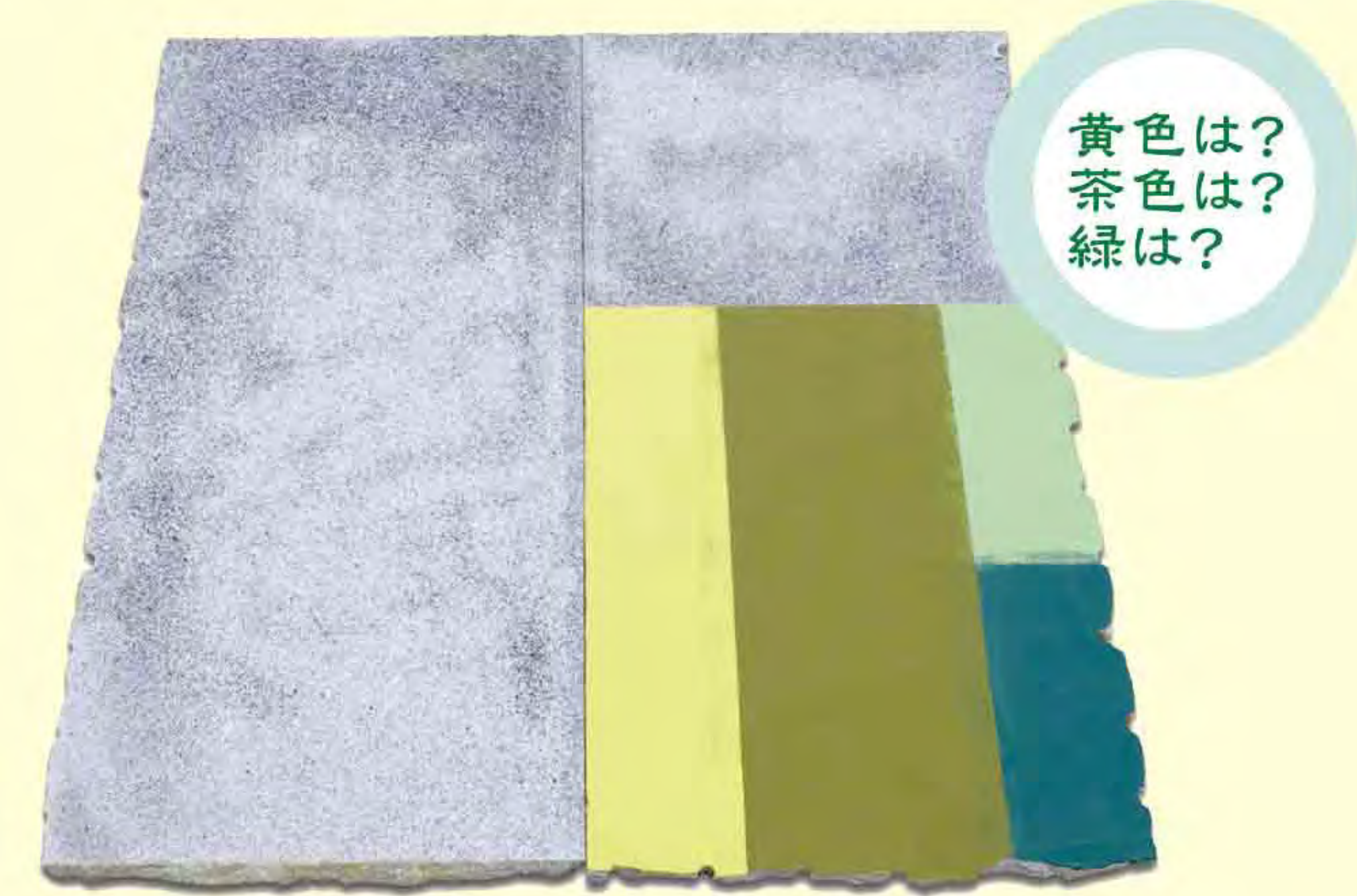
地球誕生から現代までの壮大なドラマを体験する「地球の道」。北海道富良野で活動する脚本家・倉本聡さんが塾長を務める「富良野自然塾」で考案された、想像力を刺激するユニークな環境学習プログラムです。環境ミュージアムから東田第一高炉へと続くフィールドを舞台にして、私たちの地球の不思議や現代の環境問題を驚きと発見の中で学んでいきます。

壮大なストーリーに、想像力をフル回転!

「地球がほかの惑星とは異なる奇跡の惑星だということ。そして、地球は子孫から預かっているものだということ。だからこそ大切にしなければならないということ、頭ではなく、五感でわかってもらいたい。」という、倉本さんならではの発想から生まれた環境学習プログラム「地球の道」。

「マグマオーシャンの時代」、「全球凍結の時代」、そして「恐竜絶滅」など、地球誕生から現代までの壮大な地球の歴史を、想像力をかきたてるガイドの解説を受け、自分の足で踏みしめながら体験します。

地球の内側は?大気層の厚さは?海と森の比率は?地球と月と太陽の距離は?...。地球がたどってきた歴史を想像し、想いをめぐらせながら、地球がいかに素晴らしい惑星なのか、いかに繊細でもろい惑星なのか、あなたの心で感じてください。



地球の環境をテーマにした壮大な体験型環境学習プログラム

- フィールド 北九州市環境ミュージアム～東田第一高炉史跡広場
- プログラム体験料金 大人 500円(税込)・高校生以下 250円(税込)
※北九州市内の小学校・中学校・高校の社会見学や遠足などの学校行事での体験は無料。
- 体験条件 小学校中学年以上
- 所用時間 約90分
- 各回(1回)の定員 30名 ※30名以上の団体は要相談
- お申込み 電話による予約制
※予約は原則として参加の3日前まで

北九州市 環境ミュージアム
KITAKYUSHU ENVIRONMENT MUSEUM

●北九州地球の道に関するお問合せ
TEL.093-663-6751
(北九州市環境ミュージアム)



参考文献/『北九州市公害対策史』『北九州市公害対策史・解析編』『公害行政の歩み』『環境首都レポート』
『北九州市の環境国際協力』『北九州市の環境』(以上、北九州市)
写真提供/『北九州市思い出写真館』(北九州都市協会) 北九州自然フォトコンテスト入選作品:河野サエ子